

本章では、地域の皆様からいただいたご意見等を参考に描いた、各新駅予定地周辺の将来像が実現したまちでイメージする暮らしの物語をご紹介します。



ここからはじまる物語 ～延伸後のまちをのぞいてみよう～

- （１）（仮称）大泉学園町駅予定地周辺の物語
- （２）（仮称）大泉町駅予定地周辺の物語
- （３）（仮称）土支田駅予定地周辺の物語

※フィクションです。



(1) (仮称) 大泉学園町駅予定地周辺の物語

地域の魅力に新たな交流が加わる、



ガーデニングが趣味の 60 代男性

草花に触れることが好きだった私は、退職を機に庭の手入れに夢中になった。季節の花を植え、木々の枝を整えていると、道行く人から「この道は歩いていると気持ちいいね」と声をかけられることもある。自宅の庭のみどりが、通りの風景を彩っていると思うとうれしい。



新駅の開業に合わせて駅前に花壇ができてからは、私も地域の人や子どもたちと一緒に手入れに参加するようになった。中学生と雑談しながら草を取るうちに、世代を越えて顔見知りが増えていった。まちを訪れた人が花壇の前で足を止め、写真を撮る。そんな地域の内外から人が集まっている様子を眺めることも、今では私にとって幸せなひとときになっている。

私にとってガーデニングは、趣味であると同時に、まちと関わる入口でもある。花やみどりを手入れする小さな活動が、人をつなぎ、大泉学園町のにぎわいや豊かなまち並みを支えているのだと感じている。



にぎわいのまち

商店街でカフェを運営する 30 代女性

私は、新しい駅ができる少し前に、大泉学園通りの空き店舗で小さなカフェを始めた。通勤・通学の人に加え、買い物や散歩を楽しむ人も行き交う場所だ。気軽に立ち寄ってもらえるよう、テイクアウト用の窓をつくり、店の外には小さなベンチを置くことにした。すると、通りがかる人がふらっとのぞいてくれるようになった。桜の時期は特に多くの人を訪れ、店で買ったものをベンチで味わいながら、桜並木の風景を楽しんでいる。そんな時間を過ごせることが、この店の魅力になっている。

商店街の方々にも温かく迎えてもらい、私の店も地域のイベントやスタンプラリーに参加するようになった。新しい駅ができてからは、電車でこのまちを訪れる人も増え、駅を起点に周辺のお店を巡りながら、私の店にも立ち寄ってくれることがうれしい。商店街の方や、地域の内外から訪れるお客さんとの会話を通じて、日々このまちの新たな魅力に気づき、好きなところが少しずつ増えている。





(2) (仮称) 大泉町駅予定地周辺の物語

みどりの中で様々な人が集い、



このまちで生まれ育った 30 代女性

私は、子どものころから大泉町もみじやま公園で遊び、結婚して子どもが生まれた今も、夫と子どもと一緒にこのまちで暮らしている。

新しくできた駅からデッキを渡り、久しぶりに家族で公園を訪れた。駅前と公園ではマルシェ*が開かれ、公園の中では、自然を活かした遊び場で楽しむ子どもたちの姿も見られた。昔からある公園に様々な人が集まり、新しい楽しみ方や活動が生まれていることに驚いた。

私が子どものころに植えられたもみじの木は、すっかり大きくなっていた。春の花、夏の木陰、秋のもみじ、冬の澄んだ空気。子どものころから見てきた風景を、今は家族と一緒に楽しむことがうれしい。

これまでは地域の人に見守ってもらう側だったが、これからは家族で公園の清掃活動にも参加し、このまちの風景や思い出を次の世代につないでいきたい。



新たな活動が生まれるまち

写真撮影に来訪した 50 代男性

写真撮影という共通の趣味を持つ友人に誘われ、私は友人が住む大泉町にやってきた。坂道が多いとは聞いていたが、駅前で利用できるゆっくり走るマイクロモビリティのおかげで、まちなかを無理なく移動できた。

赤く染まったもみじ、木漏れ日の道、白子川の流れ、坂の上から望む住宅地。歩くたびに異なる表情の風景に出会うことができ、カメラを向けたくなる場面が次々と現れた。

最初は自然の風景を撮るつもりで訪れたが、花壇を手入れする人、自然体験を楽しむ子どもたち、マルシェ*の準備をする地域の人たちの姿にも惹かれた。みどりの中で活動する人々の表情が、このまちの風景をより豊かにしている。風景と人の活動が重なり合うこのまちを、また訪れたいと思った。





(3) (仮称) 土支田駅予定地周辺の物語

農と暮らしが調和する、



子どもと農業体験をする 40 代女性

私は、小学生の息子に、食べ物がどのように育つのかを知ってほしいと思い、親子で近くの農業体験に参加した。最初は子どもの学習の機会をつくるためだったが、今では私の方が夢中になっている。

地元の農家さんに教わりながら土に触れ、種をまき、野菜が少しずつ育っていく様子を見る。食べず嫌いのあった子どもも、「自分で取った野菜だ」と収穫した野菜を食べるようになった。

その農業体験には、地域の人だけでなく、電車に乗ってまちの外から来る親子も参加している。何度も一緒に土に触れるうちに、住んでいる地域に関係なく、自然と会話が生まれるようになった。皆さんが子どものことを覚え、「今日は上手にできたね」と声をかけてくれる。暮らしのそばにある農から、子どもを見守ってくれる人の輪が広がっていることがうれしい。

つながりのまち

自宅で仕事をする 50 代男性

自宅で仕事をしている私の暮らしは、新しい駅ができてから変わった。

以前は、買い物や用事のたびに光が丘まで自転車で出かけることが多かった。今では、駅の周辺にスーパーや飲食店、病院、駐輪場などがそろい、日常の用事を身近な場所で済ませられるようになった。

仕事の昼休みには、直売所まで歩いて行き、採れたての野菜を購入することが増えた。休日には、駅前広場で開かれるマルシェ*を訪れ、農家や販売者の方から、おいしい食べ方や農業の話を聞いている。帰りは農地やみどりのある道を歩きながら、買った野菜で何を作ろうかと考えることが、よい気分転換になっている。

地元での買い物が地域の農家やお店を支えることにつながると思い、この習慣を続けている。家の外で過ごす時間が増えるにつれて顔見知りも増え、外出や買い物のたびに言葉を交わすことが、暮らしの楽しみの一つになっている。





大江戸線延伸-沿線まちづくりデザイン-